

## ネヘミヤ記6章「指導者への攻撃」

### 1A 「話し合い」という妨害 1-4

### 2A 「中傷」に反応させる誘い 5-9

### 3A 御言葉に背かせる預言者 10-14

### 4A 縁故主義 15-19

## 本文

私たちの学びがネヘミヤ記 6 章に入ります。城壁の再建の工事が進んでいますが、これまでに大きな攻撃がありました。4 章では、ユダヤ人に対する外部の敵からの攻撃でした。落胆や恐れを周囲の有力者たちが吹き込みました。それに対して、みなが武器を持って、武器を持ちながら仕事をしました。5 章では、内部における不一致の問題でした。互いに重荷を担いあう、愛の律法を守っているかどうか？が問われます。自分自身だけを求めるのではなく、キリストの思いを持ち、他者を顧みる心です。

そして今晚見る 6 章は、指導者個人に対する執拗な攻撃です。城壁の完成が近づけばそれだけ、敵の攻撃も陰湿になり巧妙になります。黙示録において、主が来られる時が近づけばそれだけ、悪魔が地上に落とされたので最後のあがきをして、暴れます。「黙 12:12 しかし、地と海はわざわざいだ。悪魔が自分の時間が短いことを知って激しく憤り、おまえたちのところへ下ったからだ。」それと同じように、神の働きが完成するにつれて、悪魔が激しく攻撃してくるのです。

ここで大事なものは、指導者個人にしか分からないのです。他の全ての人、何が起こっているかも知らずに、いつもと変わらないと思って過ごしています。けれども、指導者にとっては孤独で熾烈な戦いにもなります。イエス様のことを思い出せばすぐに分るでしょう、ゲッセマネの園における熾烈な霊の戦いの祈りに、共に祈れた弟子はただ一人いませんでした。主のみが、その与えられた杯を受け取るところの葛藤を抱いていました。ネヘミヤ個人に行われた攻撃を見ていきます。

### 1A 「話し合い」という妨害 1-4

1 さて、サンバラテ、トビヤ、アラブ人ゲシム、その他の私たちの敵に、私が城壁を築き直し、破れ口が残っていないことが伝えられたときのこと、ただし、まだ門には扉を取り付けていなかったときのことである。

破れ口は残されておらず、残りは門に扉をつけるだけになりました。門というのは、当時の町、城では、外敵から守る決定的な出入り口になります。夕暮れが来て門を閉じれば、その後で誰が来ても閉じておきます。それはむごいと感じるでしょうが、ちょうどそれは、洪水が来ているのに堤防を開くぐらいの危険な行為だったので、そうしたのです。ですから、聖書には神の国に入ることを、

戸を閉じる、戸を開けるという表現が使われますね。フィラデルフィアの教会に、イエス様は門を開けておくことを約束しておられました。新しいエルサレムでは、門は閉じられることはない、つまり救いが完成していて、完全な平和があることが示されています。

ですから、門に扉が付いていないだけの状態というのは、あともう少しであるのに、最も大事なものがない状態です。ここでの最大の敵は「油断」であります。完成が近いのだから、ゆっくり進めても良いだろうという油断が出てきてしまいます。そのすきを見て、敵は攻撃をしかけてきます。

2 サンバラテとゲシムは私のところに使いをよこして言った。「さあ、オノの平地のケフィリムで会見しよう。」彼らは私に危害を加えようと企んでいたのである。3 そこで、私は彼らのところに使者たちを遣わして言った。「私は大工事をしているから、下って行けない。私が工事をそのままにして、あなたがたのところへ下って行ったために、工事が止まるようなことがあってよいものだろうか。」4 彼らは同じようなことを、四度も私のところに言ってよこした。それで私も同じことを彼らに答えた。

オノの平地にあるケフィリムのところで会見をしようと誘っていますが、オノはルダというところで、ヤッファに近いところにあります。サンバラテの治めるサマリヤ地区との境にあります。エルサレムからそこまで行くのに、車で一時間ぐらいかかります。つまり、そこまで行くのに時間がかかります。そこで会見をしようというのです。ここでの策略は二つあります。「会見しよう」ということです。仲たがいはするのではなく、話し合っただけで仲良くなろうという誘いです。けれども、危害を加えるためだとありますね。私たちの話し合いには、死をもたらず話し合いもあります。不正と正義には混じりあうことは何一つありません、世との頸木を負うことはできないのです。

そして第二の策略は、「工事以外のことをさせて、工事を止めさせる。」というものです。「彼らは同じようなことを、四度も私のところに言ってよこした。」と言っていますね、その度に時間が取られます。注意をそらされます。そして工事以外のことをさせて、工事をやめさせようとするのです。

このような悪魔の攻略は、個人的にはいくつも受けました。例えば、かなり前のことですが、妻と二人で旅に出ている時に、日本語学校の事務所から電話がありました。当時、教会は日本語学校の建物を使わせてもらっていました。私の知り合いの人だということです。そして携帯電話番号を残したそうです。そして私は電話しました。知り合いでも誰でもありません。内容は、ロゴス・ミニストリーのウェブサイトに乗っている説教の原稿の内容でした。そして、そこに書いてある内容に批判をしはじめました。電波が悪かったので、「もうちょっとしてから、こちらにかけ直してくれますか？」と頼んだら、「いや、電話待っています。」との返事です。私は、待っているのに返事しないのはどうしようか？と思いましたが、妻が、「かける必要はない」と断言しました。それで文字メールだけを送り、「聖書の質問であれば、ウェブサイトに記載のメールアドレスに書いて、送ってください。今、旅の途中です。」という内容を送りました。結局、返事はありませんでした。

「聖書の質問」という誘いで妨害しようとした敵の攻撃です。旅をしていることを、聖書の質問よりも優先するのか？という攻撃の声を、私は心の中で聞くのです。そして、悪魔は罰が悪いようにさせ、自分が何かとんでもない過ちを犯していると責めて、罪定めにしようとするのです。

## **2A 「中傷」に反応させる誘い 5-9**

5 サンバラテは五度目にも同じようにして、若い者を私のところによこした。その手に一通の開封された手紙を持っていた。6 それには次のように書いてあった。「諸国民の間で言いふらされ、また、ゲシムも言っていることには、あなたとユダヤ人たちは反逆を企んでいて、そのために、あなたは城壁を築き直している。このうわさによれば、あなたは彼らの王になろうとしている。7 また、あなたは預言者さえ立てて、ここユダには王がいると、自分についてエルサレムで宣言させようとしている。今にこのことは王に聞こえるであろう。さあ、来なさい。一緒に相談しよう。」

ネヘミヤ個人への攻撃は、脅しとでっち上げの嘘です。手紙が開封されていたということは、ここに書かれていることが人々に広まっているということを暗に示しています。ネヘミヤがユダの王になりたがっているということが、もしやペルシア王に伝わっているというように仕向けているのです。エズラ記にあります。かつて神殿を再建している時に、ユダの民は反抗的で、かつては王がエルサレムにいて、諸国に税金を払わせていて、それでペルシアに反抗しようとしているという手紙が王の手に渡って、それで工事を阻止したという経緯があります。それと同じ手口です。神の働きをするのですから、そこには必ず御国が拡がります。すると、これまでの秩序をある意味で壊していくのです。光が暗闇に入ります。ですから、神の権威が見えてくるので、抵抗する人は抵抗するのです。そして神に反発しているのですが、その働きに従事している人が、これまで秩序を壊そうとしている、反抗している、勝手にやっているなど、中傷を始めます。

8 そこで、私は彼のところに人を遣わして言った。「あなたが言っているようなことは、なされていない。それはあなたが心の中で勝手に考え出したことだ」と。9 これらのことはみな、「彼らの工事に対する気力が落ち、工事は中止されるだろう」と考えて、私たちを脅すためであった。ああ、今、どうか私を力づけてください。

ネヘミヤは、きっぱりとでっち上げであると答えました。公にさらされている人であれば、必ずこの攻撃を受けます。教会の指導者も例外ではありません。今は、教会の牧師で罪を犯し、社会的問題を引き起こしている人たちもいます。しかし、一切そのようなことはしていないのに、インターネット上で書き連ねられる人々もいます。「箴 18:17 最初に訴える者は、相手が来て彼を調べるまでは、正しく見える。」テモテ第一 5 章 19 節に、「長老に対する訴えは、二人か三人の証人がいなければ、受理してはいけません。」とあります。決して一人だけの証言で受け入れてはいけません。悪意をもった中傷である可能性が高いのです。

ここでネヘミヤは、主に対して祈りました。再び、ネヘミヤの力の源泉、祈りであります。確実に

彼は気落ちしていたことでしょう。恐れていたことでしょう。そこで、「ああ、今、どうか私を力づけてください。」と祈ったのです。私たちは中傷を受けると、それは違うということを何とかして分かってもらおうとして自分を擁護しようとしてしまいます。けれども、相手の目的は主の働きを止めさせることです。これを忘れてはいけません、主の命じられたことを忠実に行うことが御心なのに、その擁護自体が敵の思う壺なのです。

### **3A 御言葉に背かせる預言者 10-14**

そして次が、ネヘミヤにとって最も過酷な攻撃ではなかったのか？と思います。

10 私がメヘタブエルの子デラヤの子シェマヤの家に行ったところ、彼は引きこもっていた。そしてこう言った。「神の宮、神殿の中で会い、神殿の戸を閉じておこう。彼らがあなを殺しにやってくるから。きっと夜分に殺しにやってくる。」11 そこで私は言った。「私のような者が逃げてよいものか。私のような者で、だれが神殿に入って生き続けるだろうか。私は入らない。」12 私には分かった。今、彼を遣わしたのは、神ではないと。彼がこの預言を私に伝えたのは、トビヤとサンバラテが彼を買収したからだ。13 私が恐れて、言われるがままにして罪を犯し、私の悪評が立って、私がそしられるようにするために、彼は買収されたのだった。

ネヘミヤは、シェマヤを信頼していました。彼は祭司でした。ネヘミヤが何か相談しに、彼の家にやって来ました。すると彼は、引きこもっていて、自分の身の安全も危ないというふりをしていました。「そして、あなたがこの家の中に入って来たら、殺されてしまう。誰も入ってくるのでできない、神殿の本堂中で会おう。」と言ったのです。そう、敵とて神殿の中に入ってきたら、彼らも罰が当たると感じます。だから中に入ればよいではないか、ということです。しかも、ネヘミヤが祭司にとって重要で、霊的な指導者だから中に入ってもいいのだということです。けれども、これが、絶対にできないことはご存知ですか？聖所の中に入るのは、アロン直系の祭司のみであり、その他の者たちは入ってはいけません。かつて、ユダの王ウジヤが香をたこうとしたら、らい病にかかり、彼は隔離されました。

ですからネヘミヤは、見分けました。彼はモーセの律法、また先祖たちの歴史を知っていたのです。だからこれが、神からのものではないと見分けることができたのです。では、なぜそんなことを発言したのか？後で分かったのでしょうか、彼もまた他の預言者も、トビヤやサンバラテによって買収されていたのです。

これこそ、最も恐ろしい攻撃です。自分の信頼する福音に仕える働き人が、自分の利己的な目的のために神の名によって語るようになります。かつて、北イスラエル王国の初代の王ヤロブアムに対して、ユダからの若い預言者が預言をしました（I列王 13章）。その帰り道、主ご自身から寄り道をしてはいけなと命じられていたのに、老預言者がやって来て、「私も預言者で、あなたが食事をするように主に告げられたのです。」と言われました。それで、食事をしたら、彼が帰り道に

獅子に殺されてしまったのです。神の名を出して、自分のしたいことを押し付けてくるのです。

こういう人は自分たちに何か、期待しているものがあります。そして、自分が達成したい隠れた目的があります。それがかなえられないと知ると、攻撃的になり神の名によって告発し始めるのです。イエス様が悪魔から、詩篇 91 篇の言葉を使って神殿の頂から落ちるように誘いました。ここで試されるのが神の御言葉です。ネヘミヤは、本堂の中に入ってはいけないということを、たとえ相手が、靈的な言葉を使っても見抜いたのです。それは、彼が御言葉に接していて、靈的識別力があったからです。

14 わが神よ。トビヤやサンバラテのこれらのしわざと、また、私を恐れさせようとした女預言者ノアデヤや、その他の預言者たちのしわざを覚えていてください。

復讐は神のすることです。主の御名をみだりに唱えているのですから、これは重罪に当たります。しかしネヘミヤは、その裁きを主に任せました。神だからこそ公正な裁きができます。こうやって、主の命じられていることを最後まで忠実に行うのです。

#### **4A 縁故主義 15-19**

15 こうして、城壁は五十二日かかって、エルルの月の二十五日に完成した。16 私たちの敵がみなこれを聞いたとき、周囲の国々の民はみな恐れ、大いに面目を失った。この工事が私たちの神によってなされたことを知ったからである。

エルルの月 25 日は、9 月 20 日ぐらいです。つまり 7 月の終わりに始めて、そしてこの日に完成しました。たった五十二日です。物理的な建設はとても容易だったのですが、靈的な建て直しがいかに困難であり、熾烈な戦いかを物語っています。本当に一つのことをするのは、一見、易しそうに見えます。私たちはしばしば、自分の靈的鈍感さにじれっかくなります。なぜ、このような簡単なことさえ自分ではできなのか？と思う時がありますね。けれども、だからこそネヘミヤ記を学んでいます。彼のように主にすがるのであれば、そこには神の知恵があり、靈の戦いに打ち勝つことができるのです。

そして、私たちはネヘミヤのように、神の共同体として敵の面目を失わせてみたいですね。それは、御霊の一致によってしっかりと建てられ、結び合わされている時に、敵は大いに面目を失います。エルサレムにホロコースト記念館があります。そこで子供たちの犠牲を悼む殿堂があるのですが、そこを出ると丘に住宅地が見えます。そしてユダヤ人ガイドが言いました。「これが、私たちの復讐なのです。」そう敵は子ども大人も根絶やしにすることでした。その敵を殺すのではなく、彼らの目的、面目を潰すことこそ、つまり、子だくさんの家庭を築くことこそが復讐なのだということです。主の願われていること、その働きを完遂することこそが、敵の面目を失わせることなのです。ここに私たちが集中しなければいけないことですね。

そして、ネヘミヤは再び神に栄光をお返ししています。「この工事が私たちの神によってなされたことを知った」と言っています。これは神の御心だったからこそ、これだけ早く完成させることができたのです。次にネヘミヤは、水面下で起こっていた熾烈な戦いを紹介します。

17 またそのころ、ユダの有力者たちはトビヤのところにひんぱんに手紙を送っていて、トビヤも彼らに返事をしていました。18 それは、トビヤがアラフの子シェカンヤの婿であり、また、トビヤの子ヨハナンもベレクヤの子メシュラムの娘を妻に迎えていたので、彼に誓いを立てていた者がユダの中に大勢いたからである。19 さらに、彼らは私の前でトビヤの善行を語り、彼に私の言うことを筒抜けにしていた。トビヤは私を脅すために、たびたび手紙を送って来た。

なんと、ユダの主立った人々の中に、アンモン人トビヤと縁を結んでいた者たちがいたのです。トビヤにとってアラフ族のシェカンヤが自分の義父でありました。そして、トビヤの子ヨハナンも、城壁の工事に携わっていたメシュラムを自分の舅にしていたのです(3:4,30)。3章に出てきます。エズラが嘆き悲しんでいたこと、異邦人との婚姻がこのような形で代表者たちの中から浸透していました。そしてこの肉のつながりが、霊のつながりよりも強くなってしまっていたのです。肉のつながりは、時に霊のつながりを強く妨げます。イエス様が何度となく、自分の肉の家族ではなく、主の言葉を聞き、それを行う者が家族なのだということを語られました。自分の家族の一員を憎むことなくして、自分の命そのものも憎まずして、弟子になることはできないとも言われました。なぜこうも過激なことを言われるのか？それは、肉のつながりが、御霊の導きに従わせなくさせるからです。

このつながりによって、ユダヤのおもだった者たちは、ネヘミヤに対する陰湿なトビヤの攻撃に対して盲目になっていました。トビヤの表面的な善行にのみ目が留まり、ネヘミヤがなぜトビヤをそんなに嫌っているのかが分からないという状態でした。ネヘミヤが悪者になってしまったのです。指導者は時に、たとえ悪者に思われても絶対に譲れない、妥協してはいけないことがあります。トビヤの悪行は、ネヘミヤにしか分からないようにされていました。そしてネヘミヤは、このような手紙が頻繁に交わされていたのを知りながらも、工事を熱心に行っていました。ネヘミヤは、本当に自分が何をしなければいけないのかを分かっていた人でありました。

先ほどお話したように、ネヘミヤは決して教会の牧者だけに当てはめる話ではありません。主は、ご自分に仕える者に、その忠実さに応じて任せていかれます。その任されていく中で、そして、ネヘミヤと同じような戦いが広がっていくことを、自分の霊の目で見ることになります。それは孤独な戦いです。ネヘミヤにしか分からない敵の陰湿な攻撃も出てきます。しかし彼には味方がいました。主ご自身です。この方に祈り、この方に拠り頼みました。そして、確かに主は事を成し遂げてくださいました。